

「具体⇄抽象」PJ 報告②「具体⇄抽象」能力とは

企業経営漫談士 岡野実空

前回のMCN「具体⇄抽象」プロジェクトの背景説明に続き、今回のコラムはその解説第一弾。まず「具体⇄抽象」能力とは何か、その低下によって世の中で何が起きているのか、を確認することから始めます。尚、「具体⇄抽象」能力の詳細については、今回のプロジェクトの底本、『「具体⇄抽象」トレーニング』（細谷 功著、PHP ビジネス新書）をご参照ください。

その1: 篠田節子氏による解説

「具体⇄抽象」に関する我がモヤモヤを、かつて一気に晴らしてくれたのは、小説『女たちのジハード』で愛読者になった篠田節子氏のエッセイ。以下は、その小股の切れ上がった解説の一文です。

「世代、性別を問わぬ『活字離れ』が指摘されて久しい。確かに、必要な情報を得なければならないとき、必ずしも活字が有効な手段とは限らない。映像の方がイメージをつかみやすく、電子情報なら必要な部分だけを手際よく取り出せる。ただし、そうして得た情報を理解し活用するに当たって必要なのは、実は活字を読むことによって養われた能力なのである。

読む力とは文学的な能力ではなく、「具体的事象」をいったん『抽象化』し、『抽象的な概念』から「具体的事象や場面」を想起するという、『一連の転換能力』のようなものであろう。それが人にふさわしい複雑な思考を可能にする。そうした力を養うのが成長期の読書であろう。子どもの活字離れというのは、文化的な危機であると同時に、人格的な危機でもある。」(1999年3月14日付朝日新聞『寄り道ピアホール』より抜粋)

その2: 畠山芳雄氏の遺伝子

上記のエッセイは、私に下記の確信と大きな成果をもたらしました。それはまずそれに先立つ数年前、JMAの大御所・畠山芳雄氏との初対話の収穫であった、『教訓抽出能力』の重要性の社会的な裏打ちです。そして以前のコラムにも書いたとおり、「具体⇄抽象」能力というその基盤を明確に把握できたことが、その後のセミナーなどの「メリハリ」と「わかりやすさ」につながったのです。

そしてその遺伝子は、イノベーションの「触媒」の要素としてMCNに引き継がれました。今回のプロジェクトの目的は、その10年間の試行錯誤の体系化とプログラムの整備なのです。

『三々な経営』

- 3-16 「イノベーション」の壁③個人編
- 3-28 社内用語の3分類
- E-32 先達の遺訓②畠山芳雄氏

その3: 「具体⇄抽象」能力低下の影響

さてこのプロジェクトを外部的方に説明した際、必ず受ける質問は、その能力低下が惹き起こす現象です。それは篠田女史の懸念が、社会の至る所で現実化したものに他なりません。具体的には、「いいね！」や「やばい！」など短文ばかりの生活に慣れ、ちょっとした文章を読んでも内容が理解できない。またそれを耳で聞いても同様で、ビジュアルや他人の力を借りない限り、その意味やイメージがつかめないという深刻な若者の姿です。

また近年話題を呼んだ、新井紀子氏の『AI vs 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）。そこでは児童生徒に焦点を当てていますが、それがいまに始まったことではなく、すでに大人の世界にも蔓延しているという事実は、橋本氏が『もっと言うてはいけない』（新潮新書）で数々のエビデンスを挙げ明らかにしています。ましてそれに該当する人間が首相になり、世界的な自動車メーカーのトップに長年君臨しているということからも、我が国における深刻さを痛感せざるをえません。

その上そこにインターネットが加わり、このまま放っておけば、その文化的かつ人格的な危機が底なしになることは確実。少子化に悩む我が国に、もはやそれを傍観している余裕はありません。ということで今回は、この問題に関し、皆さんの組織の内外でいま何が起きているかを確認します。

2021年10月11日 実空